

青春の満蒙開拓青少年義勇軍

山下 清市



て一九三八年（昭和十三年）を第一次とし、以後の一九四五年の第八次まで、高等小学校の青少年（若干の年長者あり）が志願で参加した。

私の生まれたのは、宍粟市山崎町の北はずれの、四〇戸程の小さな村

でした。農地も少なく十四町歩程の面積しかない、揖保川が氾濫すれば陸の孤島になる事がある、揖保川沿いの集落でした。生家は二反の小作で貧しい暮らしでした。六年生になった時、神野小学校より、高等科を終えた三人の男子が、満蒙開拓義勇軍へ、応召兵と同じように送られて壮途についた。その頃から私は、親が働いても麦飯で、五月にもなれば南京米を食べるしかない農家、親は勉強より働けと口癖だった。先生に満州へ行けば十町歩の土地が無償で貰えると教えられ、宏漠千里の夢を考えるようになった。

この義勇軍は、北辺の守りに五族共和と満州建国を目指す、国策とし

て一九三八年（昭和十三年）を第一次とし、以後の一九四五年の第八次まで、高等小学校の青少年（若干の年長者あり）が志願で参加した。

私たちは、第五次募集で一九四二年（昭和十七）の三月半ば、学校を

練り上げ卒業となり、親の反対を押し切り、今の宍粟市山崎町清野を出征兵士と同じに挨拶を述べ、送りだされ、村では同志六人が並び、教師、生徒達の多くに送られ、宍粟郡より三十六人の多数が送り出された。播磨新宮までトラック、それからは汽車、私は見るも乗るのもこれが初めての汽車に乗るのだった。家を出る時、母に駅のホームで汽車との間に足に気をつけよと言われたのをなぜか今も覚えている。神戸で兵庫県の全員一五〇余名、湊川神社で壮行会が行われた。神崎郡からは四人の同い歳の少年が参加していた。以後同じ釜の飯を食い生死を共にし、戦後今も変わらぬ仲である。その日の夜行列車で東京に向かう。あくる朝、雪の積もる宮城を遙拝し、その夕方

茨城県の内原駅に下車、雪の降る夜の道を、満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所の営門をくぐり、夜のことゆえただ円錐形の杉皮葺の兵舎、日輪兵舎が並んでいた。それぞれ名前を呼ばれ、五つの兵舎に一小隊より五小隊に振り分けられ、同級生の志水君と同じ四小隊であった。我々の所属名は埼玉・兵庫の混成で河南中隊（河南貞雄氏）と言い、以下五小隊の組織で、親元を離れ初めての集団生活（実は混成の埼玉の隊員は我々より二週間程早く入所していたのだ）。

一応先輩であるから聞いたり、教わることが大変だった。それは、埼玉の関東言葉に「おいてめえ何してるんだ」「ばか野郎」と言った具合で二週間の先輩にたじたじであった。指導員は、農事は松岡一治氏（この人は戦後福岡町の農業普及員を定年までされた）、庶務医療は関小平氏、訓練は橋本誠三氏であった。小隊長は内原の郷土出身の幹部候補の年長者が配属された。

誰も初対面の隊員で訓練が始まり、体操は「大和体操」ヤマトバラキと言う天孫降臨にあやかる。掛け声も、ヒイ・フウ・ミ・ヨ・イ・ム・ナ・ヤ・コ・トと言う。それに義勇軍綱領等全てが「神ながらの道」の

精神と教え込まれた。その半ばの四月十九日、アメリカ軍の本土空襲があり、内原の遠く東の松原をかすめ低く飛んだのを覚えている。開墾の訓練は基本の天地返しの手法である。武道は銃剣術、次いで古武道、太い木剣の前進後退打ち下ろし等厳しかった。入所して三日すると体に虱（しらみ）が寄生し始めた。ここにきて虱を知るが、これからの生活は虱がずつとついて回る。水戸の偕楽園にも行軍の折に見学し、いよいよ五月になると渡満の日が近くなる。五月十二日、渡満壮行会の分列行進で始まり、営門を音楽隊を先頭に内原駅より乗車、東京駅で下車。ここで埼玉県の隊員は家族と面会があり、二重橋前にて皇居遙拝、広場の小石を数個リュックに入れ、現地に埋めべく後にした。

夜行である日、伊勢の内宮に参拝、その日のうちに神戸につき、移住協会のホテルに一泊し十五日早朝、生田神社に参拝を終え、神戸の港へラッパ鼓隊先頭に行進する。メリケン波止場にて兵庫県の隊員の家族との面会となる。

親元を離れ三ヶ月ぶりに家族と会う事ができ、学校の恩師も来られ、時間が短く感じられた。午後、乗船

精神と教え込まれた。その半ばの四月十九日、アメリカ軍の本土空襲があり、内原の遠く東の松原をかすめ低く飛んだのを覚えている。開墾の訓練は基本の天地返しの手法である。武道は銃剣術、次いで古武道、太い木剣の前進後退打ち下ろし等厳しかった。入所して三日すると体に虱（しらみ）が寄生し始めた。ここにきて虱を知るが、これからの生活は虱がずつとついて回る。水戸の偕楽園にも行軍の折に見学し、いよいよ五月になると渡満の日が近くなる。五月十二日、渡満壮行会の分列行進で始まり、営門を音楽隊を先頭に内原駅より乗車、東京駅で下車。ここで埼玉県の隊員は家族と面会があり、二重橋前にて皇居遙拝、広場の小石を数個リュックに入れ、現地に埋めべく後にした。

夜行である日、伊勢の内宮に参拝、その日のうちに神戸につき、移住協会のホテルに一泊し十五日早朝、生田神社に参拝を終え、神戸の港へラッパ鼓隊先頭に行進する。メリケン波止場にて兵庫県の隊員の家族との面会となる。

親元を離れ三ヶ月ぶりに家族と会う事ができ、学校の恩師も来られ、時間が短く感じられた。午後、乗船

の時間となり、テープを握り「海ゆかば」の合唱の中、船は岸壁を離れた。関門海峡は夜で玄海灘は波が荒く、船が大きく揺れ、船酔いする者もあり、海の濁りで黄海に入ったと聞く。大陸の玄関口大連で一泊、あくる日、旅順の白露戦役の戦跡を見学する。二百三高地の戦跡を見てこんな草原では突撃に突撃で、屍るいと重なったと言う通り、住時を偲ばず見学であった。

目的地は北満州なれば奉天・新京・ハルピン・チチハルと通り、内蒙古との境の町、成吉思汗の一つ手前の小さな大溝駅で下車、ここから歩いて三キロの豊栄訓練所に入所する。当時はなだらかな山に木と思うものはみえず、樹木のあるのは鉄道の駅くらいであった。営門の門柱には「満州開拓青年義勇隊満鉄豊栄訓練所」左の門柱には「満鉄豊栄日本青年学校」。ここは既に先輩達が三年の現地訓練を終え、成吉思汗の近くに豊春・豊秋と言う名前が入植しており、豊栄訓練所は日本馬・牛舎・豚舎・鶏舎・綿羊と家畜がいて、農作業と鉄道警護を主に、近くを走るハルピン・満州里を走る濱州線の安全警備の為の義勇隊の訓練所であった。軍事訓練と農作業と半々である。



豊栄訓練所の朝の点呼

わり、環境の変化が原因か寝小便をする者があった。恥ずかしいから黙って布団をそのままにする。暖房のオンドルで床が温もると臭うから所詮いじめられるのを氣遣ってオンドルの近くに替ってもやまず、何時からかなくなつた事があった。長い冬の間は、毎日が軍事訓練で厳しかった。忘れられないのは冬に起きる野火である。夜中に遠くの空が明るく見えるのは、内地では山火事だがこの草原では野火、落雷とかまた草原を走る列車の落とした熱い石炭がらが原因で燃えだすのだ。近ければ四・五日で、遠くの火になれば時には三週間も燃え続け近づいてくる。

近くには冬場の家畜の乾草が点々として山に積まれており、防火線を作る草刈りに全員で夜中に出る事もあり、冬場は狼の吠える声ガラスに響き、聞き耳を立て郷愁を募らせ、また歩哨についた時など土塀の内に怖くなって立った時もあった。そして放牧の綿羊「羊」が襲われた事もあり、この三年の内嬉しかった事は、札蘭屯の町へ関東軍の部隊に内地からの慰問団がこられた時には、芸能人の可愛い女性にうっとりさせられ、日本の女の子の顔も見事もない我々は皆故郷を想い泣く者もい

た。入院したりチチハルの街に公用で行ったりした人は、息抜きができたらしい。でも元気で機会のない隊員はそんな思いもなく、訓練は厳しく屯墾病になった者もいた(夜布団の中で親・故郷恋しと涙するを屯墾病と言った)。

厳しい北満の冬は、凍結するため第一に井戸の水汲みに、正月頃になると井戸端は零れた水が凍りつき高くなって坂になり、井戸の口と同じ高さになり、釣瓶の零れる水も汲み上げる時水が回りに凍りつき、穴がだんだん狭くなり釣瓶が通らなくなるので、氷を取り除かなくては水が汲めない。それで長い槍でつき落とさなければならぬ。便所がまた大変だ。凍りついて小の方は溢れるようになり、掘り起こして捨てる。大の方は凍って同じ位置に落ち同じに積もり、どんどん積もり高くなり尻に付き刺さるほど高くなり積もる糞柱を壊し外に出すのだ。ところが便所が建物より離れているために、夜中の小用に表に出ると、寒いので歩きながら放尿し便所につくまでに終わり、飛んで帰る不届き者がいるために、朝になると雪に残る印にも誰か分からず春まで残り、集団生活の汚点であった。